
ゲンミツにシンドイ

花倉 小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲンミツにシンドイ

【Nコード】

N4263U

【作者名】

花倉 小雨

【あらすじ】

珍しい？ 田市。田島さん視点。

(前書き)

田島さんもイチちゃん先輩も偽物ぽいですが、宜しければどうぞ。

今日は久々の休みだ。いきなり休みになると暇なもんだ。

暇に任せてロードワークしたのはいいけど、ちっと疲れたな。汗だくで気持ちワリイけど、ツーホーされかねないから脱がないぞ。花井に言われたからって訳じゃねえけど。

しかし喉渴いたな。近くの公園に入り、自販機を探す。子どもの多いそこ。視界の端に、見知った人を捉えた。

（埼玉、の投手？）

うん、だな。あのツンツン頭はそうだな。子どもに混ざって遊んでんのかなー。バット、グローブ、野球ボールだけではなく、サッカーボールも傍らに見える。

いや、こんな時って話しかけるべきか？ 5番とは話したけど、投手とは話してねーし、覚えてねーかもだな。こーいうときってなんか気づいた方が気まじくね？

まあいいか。お、自販機はつけーん。味噌汁置いてるし。売れてねえんだろ。さて、確か金は、と。

「お兄ちゃんっ！」

「だいじょうぶ!？」

子どもが次々と、そんな感じの事を言う。何事かと見てみると、埼玉の投手が、小さな子どもに支えられて、頽れていた。

すげえ汗かいてる。もしかして熱中症か？ 周りには、大人がいない。オレが行かねえと！

「大丈夫、すか？」

「あ、あのね！ ゆたかお兄ちゃん、が！」

「たおれちゃった！」

えーと、えーと。こういう時ってどーすんだっけ！

「……っ、お前、ニシウラの……？」

「立てますか！？」

意識ある！ じゃ、陰になるとこで……周りが木ばっかで助かった。半ば強引に腕をとって、涼しいところに誘導した。

次は、身体を冷ますんだっけ？ ぐあーこんなときシガポが居てくれたらなー。子どもが見守る中、投手の服を脱がす。で合ってるのかな？ そんな次は、水分と塩分。スポーツドリンクは避ける、とかだったような……！

「お兄ちゃん、だいじょうぶ……？」

「お、お前帽子被ってるのか」

傍に寄ってきた一人の男子。被ってる帽子で、投手を扇ぐように指示した。ホントは団扇とかあれば楽なんだけど。

水分と塩分……。あ、味噌汁でいんじゃない？ てかアレこういう時のためか。塩分、だろ？ 熱いだろうけど……。水も取り敢えず買っとくか。脇だか首だか冷やすし。

心配だけど、子どもたちに任して、オレは自販機へ走った。

「飲めるっすか」

「おみそする……？」

「塩分摂らせねえといけないからな」

子どもは不思議がってた。うん、オレも合ってたのかわかんねーよ。一応、手洗い場の水かけて冷やして温くした味噌汁を投手に渡してみる。飲めそうになかったら口移しかなー。てか救急隊呼ばないといけないのか。

投手。名前なんだっけ、イチチャン？ はプルトップを引いて味噌汁を一口、口に含んだ。

「……わりいな」

飲んだあと、投手がオレに向けてそう声かける。はーもー取り敢えず良かった。後は休ませとくだけだしよ。多分だけど。水を渡した。

「オレこーいうの慣れてないんで……。楽になりました？」

「……ん、まだちょっとシンドイ。ありがとな、お礼しなきゃなあ」

投手が喋れるようで良かった。子どもたちは、帰らしとくべきか。投手が、子どもたちに話しかけた。

「ごめんな、お前ら。練習はまた今度だ。皆で遊んでこい。熱中症に気を付けろよ」

「お兄ちゃん……。はやく元気になってね、また遊ばーね！」

「ゆたかお兄ちゃんのスクリューうてるように、おれがんばっからな！」

「おー。頑張れよな」

オイオイ。

子どもにスクリュー投げてんのか？ 二つの意味でびっくり。

「あー、お前、タジマだっけ？」

「はい、そっすけど」

「……まだ時間大丈夫か？」

「平気です」

「じゃあ、悪いけど……」

投手はオレの手を引く。

「……少し寝るから起こしてくんねえかな」

うお、ちよつとびっくり。いいすよ、と返事すると、投手は服を着直す。あ、確認しとこ。

「あの、名前ってイチチャン先輩すよね？」

「……っ、いやまあ。間違っちゃねーけど」

「すんません」

佐倉大地しかまともに覚えてねえ……。

イチチャン先輩は、オレの手を改めて握って、寝る体勢に入った。え、なんだこのパターン。可愛いな、オイ。

ていうかオレ、モノスゲエ暇になりそうだぞ。

あー、まあいいか。

傍らにいる目を閉じたイチチャン先輩を眺めながら、更なる暇に身を委ねた。

(後書き)

お読みくださりありがとうございます。

超マイナーカプ田市です。

イッちゃん先輩好きなんだけど少ないので自家発電でした。

熱中症にはお気をつけください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263u/>

ゲンミツにシンドイ

2011年10月7日10時09分発行